

2024.12.30.

T.Kobayashi

深川から浅草へ そして千住へ

世間ではクリスマス・イブだと言って騒々しい日、半蔵門線の清澄白河駅に降り立ったのは、もう昼飯時が近い頃だった。

駅の案内図でバス停のありかを確認して歩いて行くと、すぐにバスがやってきて、待ち時間なしの気分の良いスタートになった。

●二つ目通りに行く

バスは、「門33 亀戸駅前行」、清澄通りを北に向かって走る。この道は古くは「ニ之橋通り」と言われていた。1659年(万治2年)に江戸の水害・防火対策の一環として豎川堀が開削された時に架けられた橋に、隅田川との合流点から番号順に橋の名前が付けられ、堀を横切る南北に走る道路にそれぞれ名が付いた。「ニツ目之橋」で豎川堀を跨ぐ道には「ニツ目之橋通り」と名が付き、後の時代に「ニツ目通り」と呼ばれるようになった。清澄通りという呼称はわかりやすいが、ニツ目通りという名を残しておいた方が、歴史がわかって良かったのではないかなと思う。

小名木川を渡って、森下で新大橋通りを横切り、しばらく進むと墨田区に入る。本所ニ之橋南の交差点を横切ると豎川堀を渡る。ここがニツ目之橋だったのだが、大半を首都高速道路に覆い被されてしまって、小名木川のような景観は得られないのが残念。

*参考情報:ここにもあった番号順の橋の名前

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/mitsume.pdf>

●厩橋

両国駅の東側で総武線の線路を潜り抜けて、厩橋の東詰にある本所一丁目でバスを下車。

蔵前の米蔵で使う駄馬の厩があったことから地名が生まれ、元禄年間に「御厩の渡し」ができた。

1874年(明治7年)に木の橋が架けられたのが厩橋の始まり。1893年(明治26年)に東京府によりトラス式の鉄骨橋に架け替えられたが、関東大震災で被災して現在の橋に架けかえられた。

厩橋の下を走る都営地下鉄大江戸線は、上下線が上流側と下流側に大きくカーブして走っているが、橋の強度に影響しないようにという配慮からとのことだった。

交差点の北側にあるバス停から「草24 浅草寿町行」に乗り換える予定だったが、信号を待っている間にバスが行ってしまった。次のバスまでは小一時間あるので歩くことにした。

●駒形橋と並木通り

隅田川の東岸をさらに北上して駒形橋へ。駒形橋は1927年(昭和2年)に架けられた橋で、国内初の本格的なアーチ橋だった。関東大震災からの復興計画の一環として架橋されたが、それまでは駒形の渡しがあった。橋の西側にある馬頭観音を祀った駒形観音が、橋の名前の由来となった。(写真右上:駒形橋 右下:駒形観音)



観音堂を覗いて並木通りに入り雷門へ。並木通りは江戸時代に浅草寺境内に繋がる道に、松・桜・榎の並木が造られたことからその名が生まれたという。

●浅草雷門

雷門の前の歩道は外国人だらけで歩くのも困難な混雑で、おまけに観光客を目当てにした人力車の客引きなどもあり、一刻も早く抜け出したい混み具合だった。



観光案内所に入って、「草43 足立区役所行」の乗り場を確認してから尾張屋へ向かう。行列が出来るわけでもないし空席も目立つ店内には、何組かの外国人もいたが、日本人の観光客らしいグループもいた。彼等の会話を聞いていると、インターネット上で調べてきた知識で自慢気にお店の評判を語り合っていた。一人で来た客も何人かいたが、店員とのやりとりに耳を傾けてみると、常連客のようだった。20年ぶりの尾張屋の天井は、相変わらず尻尾が飛び出していて、値段は2,000円になっていた。足立区役所行のバスは30分に一本程度のダイヤなので、天井を食べながら時間調整をして、待ち時間が少なくて済むようにした。バス停の英語の表示を見たら「Kaminarimon-gate」と書いてあったが、これを日本語訳すると「雷門門」になることまで考えた人はいなかったのか。

●田原町

バスは13時25分頃の発車だった。雷門一丁目交差点を右折して国際通りに入る。雷門一丁目と言うよりも普通に「田原町」と行った方がわかりやすい。

田原町という町の起立は江戸時代初期になるらしい。浅草寺の寺領内の田畑しかない所で、それが町の名になったと言う。紙漉きを生業とする者が増えて、紙漉町とも呼ばれたこともあるらしい。

●竜泉寺

六区を右手に見送って言問通りを横切ると千束になる。鷲(おおとり)神社を右手に見送ると竜泉。鷲神社の東側には吉原(新吉原)遊廓があった。

竜泉は元は幕領地だったが、のちに竜泉寺の寺領となり「下谷竜泉寺村」と言われるようになった。吉原は「葎の原」「吉原田圃」と言われていたし、その西側の「竜泉」も含めて、地名から想像すればかなり広い湿地帯だったことが想像できる。

竜泉二丁目交差点を西に入り、昭和通りの手前にある竜泉寺は、真言宗智山派の寺で、室町時代以前の創建とのことだが、時期は不明らしい。樋ロー葉記念館を訪れたときに立ち寄った記憶がある。

●三ノ輪と大関横丁

三ノ輪で昭和通りに吸い込まれるように合流し北東に向きを変え、明治通りを横切るところが大関横丁。常磐線の下を潜り抜けると荒川区南千住になる。

「三ノ輪」と言う地名の起源は明かではないようだが、「三之輪」と言われた時代もあり、古い文献上には「箕輪」の表記もあるらしい。歴史を遡って行くと海岸線だった所で、「水の鼻」と言われたことから、これが転じて「みのわ」となったという説もあるらしい。

「大関横丁」は、黒羽藩の藩主大関氏がこの地に幕府から下屋敷を拝領していたことで生まれた地名。敷地面積は8,000坪に及び、その周囲の道を大関横丁と言ったことが由来。明治通りと常磐線が交差する所に「大関横丁由来の碑」が建っている。

大関氏は、那須氏を支える那須七党の一人で、関ヶ原の戦前後から徳川家康に与して戦功を上げて、二万石の大名になった。大関家は幕末まで幕府の要職に就いて貢献度が高い武家だった。

●千住大橋

千住大橋のバス停は橋の南側にあった。バスを下りて川を眺めながら橋を渡ることにした。

北側に渡ると橋の袂の小さな公園に石碑と石像が見えたので入って見たら、奥の細道の起点示す説明の碑文と芭蕉を模した石の立像があった。高く盛り上げられた土手の上には展望テラスがあり、隅田川の流れを望むことが出来るようになっていた。(写真右:千住大橋)



1594年(文禄3年)徳川家康によって隅田川の最初の橋として架けられた。二番目の架橋は明暦の大火後の復興事業として架けられた両国橋。

●足立市場

信号を渡って日光街道の東側には足立市場がある。天正年間(1580年頃)に始まった市場で、鮮魚・青物・穀物などを取り扱ってきた。奥州・常陸に繋がる街道の要衝として発達し、神田・駒込と並んで江戸三大青果市場とも言われ、付近の町は「やっちゃ場」と言われていた。

この辺りは千住橋戸町、少し北上すると千住河原町。川の流れと縁のある地名が続く。

●日光街道旧道

市場の西側を北に向かって走る細い道は、日光街道の旧道。旧道の分岐点に奥の細道の起点であること、ここに「やっちゃ場」があったことを記す看板が建っている。

旧道に入り京成本線のガードを潜り抜けると、新旧入り交じった民家の門口に、「ここに卸売問屋があった」ことを示す説明板や大店の看板が続くようになる。「昔は青果卸だった」という表記や「水産加工物店だった」という表記があり、現在も続いている蒟蒻屋があったりする。しばらく進むと旧日光街道の昔の地図が掲示してあった。往時の賑わいが想像できる地図だった。(写真右:千住日光街道地図)

墨堤通りを渡ると左側に源長寺という大きな寺があった。立派な門構えに惹かれて入って見ると、寺の正式名称は浄土宗稻荷山勝林院。1610年(慶長15年)創建とのことだった。

門の脇に立つ寺の掲示板に、こんなことが書いてあった。

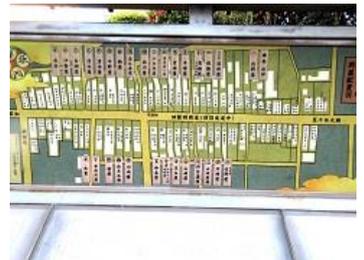
「いろいろあるけれど生きていてよかったな」と思える一生を送る開基は伊奈忠次。徳川を支えた武将の一人で、検地・新田開発・河川改修などで手腕を振るった人。炭焼き・養蚕・製塩などを勧めたりして江戸の繁栄にも大きく貢献した。茨城県・埼玉県にある「伊奈」という地名は伊奈氏に由来するもので、広域にわたって影響力を持ち、各地で有益な実績を残していた。(写真右上:源長寺)

所々で細い路地を見つけて侵入してみると、軒先をぶつけあうような民家の並びや、風格のある塀に囲まれた家があったり、時代を遡って歩いている感じがした。(写真右下:路地裏の景色)

旧日光街道から右折して駅前通りの商店街に入ると、この地に暮らす人々で賑わっており、外国人観光客に乘っ取られてしまった観光地・浅草とはひと味もふた味も違う、活気に満ちあふれていた。

駅前通を西に歩けば千住龍田町に繋がる。今秋一足早く逝った友の家がある。何度か歩いたことがあるこの道は、昔とあまり変わっていないように感じた。

日光街道の宿場「千住」は、昔も今もにぎやかで味わいのある街だ。明るく・優しく・辛抱強く・穏やかだった友の顔を思い出しながら駅に向かい、「いせや」という和菓子屋で大福を買って旅の締めくくりとした。



以上